

輝け理系女子

豊橋技術科学大学の挑戦⑤

豊橋技術科学大学の男女共同参画室長で、学長補佐も務める中野裕美教授は、大学生の息子を持つ母親。自宅は滋賀県。つまり、単身赴任で同大で教鞭(きょうじょう)を執っている。研究内容は「白色LED用の蛍光体材料の開発」。

福井高専から同大に進学。大学院修士課程物質工学専攻修了後、村田製作所に就職した。当時、同

を振り返って「そのまま会社において管理職になっていたら、自身のままだったか

になったころからよくやく学会の年会などに定期的に参加できるところになったが、

その間、男性には遅れをとり、もうひとり子どもを産む年齢でもなくなった。少子化の

理由と、女性が生産力を出遅れる現状を身をもって体感する。子どもが中学生に

少子化の理由と“出遅れ”体感

期入社75人中女性は中野さん一人。女性研究者としても会社の中でただ一人という状況だった。入社5年目には同期の中で一番に昇格試験に合格。女性初という偉業を成し遂げた。しかし、30歳を前に退職し、龍谷大学理工学部電子顕微鏡室実験講師に転職。9時～5時までの勤務時間が辛いし、育児をしながら継続できなかった。中野さんは当時

出産のため退職したかのどちらかだったと思う」と述べる。

自身のキャリア形成は、子どもが保育園児の頃は国内の学会活動はいっさい諦め、博士号を取るための論文活動に絞

り、年に一度だけ義母の手伝いを借りて海外の国際会議に登録する生活を続けた。子どもが小学生

豊橋技術科学大学 中野裕美男女共同参画室長が語る①



自身について話す中野裕美教授

なってから、それまでは自宅から通える大学の公募だけを探していたが、思い切った卒にとらわれないうえに、ステップアップの機会を探した。もちろん夫も賛成し、背中を押してくれた。結果、決まったところから母校でもある豊橋技術科学大学であった。家族を滋賀県に残しての、単身赴任生活が始まる。

(戸崎史子)